

私の保育ノート

変わるもの・変わらないもの

森藤郁子
(保育士)

一昨年の四月から愛育養護学校で働いています。私は愛育という名前を今まで見たことも聞いたこともなく、初めて訪れた時もすでに春休みで、子どもたちには会えませんでした。

「いったいどんな毎日なんだろう?」と思い巡らせてみても、やはりうまく想像できませんでした。

愛育での生活が始まり、子どもたちとそれなりに一日を過ごすことができて、何となく私の気持ちには疑問符がついたままでした。「養護学校」という言葉に、何か特別なかわりをしなくてはいけな
いと思っていたのかもしれませんが。

そんな日々を繰り返すうち、自然と自分が保育を

始めたころのことを思い出していました。

会社員から保育の仕事に転職した私は、それまで保育経験がまったくありませんでした。当時は資格も持っておらず、先生方に「子どもと遊んでいてください」とよく言われ、暇さえあれば遊んでいました。鬼ごっこ、ブロック、折り紙、ままごと……子どもたちは何でも教えてくれました。それはもう楽しくて楽しくて。一日があつという間でした。

愛育養護学校に勤めることになり、そこで突然に始まった生活は、子どもたちと私が始まる「今」し
かなく、それならばできるだけ楽しい「今」と思

森藤郁子(もりとうくにこ)

保育士、保育園給食調理員、幼稚園での子育て支援(ブレ保育)を経験。現在は愛育養護学校勤務。

うようくなりました。私の中から疑問符が消え、愛育での毎日が少しずつ変わっていきました。

ある日、帰宅すると、小学校四年生だった娘が、「今日はどうだったの?」と聞いてきました。

娘は保育中の子どもたちの話が面白いようで、いつも聞いてくるのです。その日の出来事を話すと、ひとしきり笑った後、

「ねえママ。その子たちって何年生なの? どこがしょうがいなの?」と言いました。

「うーん……。どこがしょうがいなんだろうね?」と私は答えました。

確かに、目に見えることは違うかもしれませんが、でも、夢中で遊ぶ姿も、「これやりたいんだ」という一途な気持ちも、あきらめず何度も挑戦する姿も、私が今まで出会ってきた子どもたちとどこも変わらなかつたからです。

愛育で、ある男の子が物理や宇宙の話をしてくれました。その時は、昔、保育園で出会った小さな博士たちを思い出しました。虫博士・電車博士・石博士・折り紙博士、たくさんの博士たちがいました。彼らのあまりの詳しさに「ほお」「へえ」と圧倒され、「好き」というエネルギーが、作品や説明になつてあふれ出てくるようでした。聞くだけでもとても楽しくて、私も博士になつたような気がしました。

言葉が話せない子どもたちは、身体で語ります。抱いていた子が、自分で見つけた葉っぱを取ろうと手を伸ばします。指先と手首に力が入り、それでもなかなか取れずに葉っぱとの綱引きが始まると、腕に背中に、しがみつくと手や足にも力が入っていきます。その意志の強さが、硬くなった身体を通して私に伝わってくるのです。

これは愛育での出来事ですが、言葉として表れなくても、身体を通して感じる会話のようなもの、相手

の思いというのは愛育での子どもに限らず、子育てでも保育場面でも、触れることで感じ取れるものがあるのではないのでしょうか。私はそう思っています。

保育園や幼稚園では、「絶対にいやだ!!」と泣き続けたり、気持ちを簡単に許さない子どもたちに出会います。それでもそーっとそーっと隣にいと、ゆっくりゆっくり隣にすることを許してくれる、少しずつ気持ちも身体も距離が縮まっていく、待っている、子どもたちとの大切な時間がありました。私はあの時間の流れが好きでした。

その時間がよみがえってきたのは、愛育で、ある男の子に出会った時でした。彼は真つすぐ見つめる目がとても印象的で、私の一瞬の緊張も、あらゆる気持ちも、すべて見透かされているようでした。私は戸惑いました。

でもすぐに、彼とも、あの時泣き続けた子どもたちが教えてくれたように、ゆっくりと時間を積み重ねていけばいいのかな、と思えるようになりました。彼

と出会って一年。今では一緒に過ごす時間は、たとえ短くてもとても楽しく、温かい気持ちになります。愛育のどの子と遊んでいても、やっぱり今まで私が出会ってきた子どもたちの顔が浮かんできます。まるで若葉のように光を受けて風を受けて真つすぐに伸びようとしている、みんなそんな力を持っています。それは本当に何も変わらないと思いました。

保育という仕事をしている私にとって、忘れられないことがあります。

「先生たちには、私の気持ちは絶対にわからない」と、あるお母さんに言われたことです。別に怒られたわけでもなく、自分の子育ての何気ない思ひ出話をしている中で、ふっともらしたのです。その子はダウン症でした。話を聞いていたその瞬間、この言葉はすつと私の中に入り込んできました。

私はその時から、この言葉を忘れたことはありません。忘れないというよりも、身体の中にいつも「ある」という感覚です。そしてずっとずっと考

えています。

「わかる」とは何かということ。

考えても考えてもわかるはずもないのですが、ただひとつだけわかったことがあります。

「わかった」なんて簡単に言うことではないんだ、簡単にわかつちやいけない人の気持ちがあるんだ、ということ。

それをすべてわかるうなんて、決してできないし、できるつもりでも、それはかつての私がそうだったように、「わかつたつもり」なのかもしれません。

だから、せめて子どもたちにとつても自分にとつても、新しい何かに気付けるといいなと思っています。自分にわかるだけのことを新しい気付きによって少しずつ増やしていく、そしてまた繰り返してわかることを増やしていく、それしか私にはできないのです。保育はわからないことばかりです。わからないから、子どもたちが身体中から伝えていることを学んで、自分に問い続けるしかないと思っています。

今日仲間に入れてくれてありがとう。

あなたのことを教えてくれてありがとう。

いろんなことを気付かせてくれてありがとう。今日私はあなたに少し近づけましたか？

あなたの思いに少しでも近づけたでしょうか？

そんな思いで子どもたちと遊んでいて、一緒に笑い合えた時、どんな距離をも飛び越えたような気がして、本当にうれしくなるのです。どんな子だって笑顔は子どもたちによく似合います。

五年生になった娘は、相変わらず、

「だからさー。ママの話聞いてると、まったくどころがしようがいなのかわかんないんだよねー。しようがいつて何なの？」と言っています。話しているほうもわからないのだから当たり前です。でもいいのです。その答えはいつかきくと、たくさんの子どもたちが教えてくれると思っていますからです。